

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第 卷十五第

月四年五十和昭

論叢

乘數の問題……………文學博士 高田保馬
支那の永小作制度……………經濟學博士 八木芳之助

時論

物價對策……………法學博士 神戸正雄
戰時物價對策の再出發……………經濟學博士 谷口吉彥

研究

江戸時代の經濟政策……………經濟學士 堀江保藏
期間分析と均衡概念……………經濟學士 青山秀夫
マックス・ウェバーと十九世紀の方法的意識……………經濟學士 出口勇藏

說苑

一九三九年の銀需給……………經濟學士 徳永清行
東西經濟思想の相似性……………經濟學士 穂積文雄

附錄

彙報
外國雜誌論題

期間分析と均衡概念

青山秀夫

序 舊稿「貨幣數量説の動學化としての期間分析」(經濟論叢、昭和十四年八月、四九ノ二)に於て私はケインズ對ロバートソンの論争に關して一つの考察を試みた。即ち、需要と供給とが一致するところに價格が定まるといふ法則は、經濟變動過程に於ても、常に成立するところの自明の事實であつて、此の自明の事實こそ動學的價格形式過程の究明に際してその出發點をなすのであるが、期間分析はそのうちに此の事實を許容し得ざる如き構造を有する。少くとも「期間分析」の方法を私がそこで理解した如き意味のものと解する限りさうである。表面上、ケインズ對ロバートソンの論争は、貨幣數量説的構想が投資財價格水準の問題に適用し得るか否か、に關する如くであるが、一步立入つて考へれば、問題の本質は恰も此の點に存したと解されねばならぬ。かくの如きが舊稿に於ける私の問題觀點に他ならぬが、最近相次いで公にされたヒックス及びリンダアルの著書は、此の問題について夫々の立場を明かにしてゐる。本稿の目的は、此の中後者の主張をかかふる方法的問題について紹介批判し、これに因んで自己の見解を一層詳細に展開することにある。^(注)

(註) J. R. Hicks: Value and Capital, An Inquiry into Some Fundamental Principles of Economic Theory, 1939. Erik Lindahl: Studies in the Theory of Money and Capital, 1939. 勿論此の二つの注目すべき業績が吾々に提示するところは單にこれだけに止まらず、現代經濟理論が含む限りの殆んど凡ての問題に互つてゐる。尙ヒックスについては、都合上、詳論し得なかつたが、何れ改めてその機會を得たいと思つてゐる。

「期間分析」——今此の言葉を別の機會に規定した意味に使用する¹⁾——の方法の發展とその批判史とについて、豫め説明を加へて置くことが必要である。期間分析の方法の創始は少くともD. H. ロバートソンの「銀行政策と

1) 拙稿、ロバートソンの物價變動理論—經濟變動理論の方法としての所謂期間分析の意義について(經濟論叢、昭和十四年七月、四九ノ一)参照。

價格水準」(一九二六年)にまで溯り得るが、然しここではリングダルとミユルダルとの論争を回顧すれば充分である。リングダルは「貨幣政策の方法」(一九三〇年)に於て有名なヴィクセルの累積過程の理論的再構成を試みたが、此際彼は次の如き構想を用ひた。³⁾

「動學的經過を分析するに當つて吾々は、此の經過が極めて短い期間に細分され、且その期間の短さは、價格に直接影響する諸條件並びに價格自體が期間中不變 (unchanged in each period) と看做すに差支へない程であるとする。従つて與件及び價格の變動は一切或る期間から他の期間への推移時點 (transition points between periods) に於て起ると假定される。かくて價格の發展は逐次的價格狀況の系列 (a series of successive price situations) として表し得る。

此の上に尙吾々は、此等の短い期間中の何れに於ても諸個人が期間中支配する價格について完全なる知識を有すること、また彼等の供給及び需要に關する行動は此等の價格が命ずる如きものに定められることを假定する。従つてここには諸個人が意圖する行動と現實に成立する價格との間に齟齬は生じない。かくて期間中供給と需要との一致が存するといふ意味に於て、價格狀況は均衡状態である。

かくの如くにして價格形成は夫々の期間に對して一組づつ成立つところの方程式のシステムによつて表はされる。或る期間から他の期間に互つて行はれるところの諸々の個別價格並びに價格水準の變動は價格形成條件の變動に依存するが、此の價格形成條件の變動たるや、上記の如く、諸期間の間の推移時點に於て起ると假定されるのである。」

此の想定の下では、先づ、經濟變動は不連續的・間歇的・孤立的に起るところの變動の集積と看做される。換言すれば、變動は時點に於てのみ起り、期間に互つて繼續しない。或る相當に長い期間をとつて見れば、その期間の上に變動時點が均等に、正しい區間を隔てて分布してゐる。而して一變動時點とそれに隣接する變動時點との間に横はる期間中は、價格を含めて、一切が不變である。然もリングダルによれば此の單位期間を充分短くするならば、此の擬制も現實に相當に接近し得る。⁴⁾

2) Erik Lindahl: Penningpolitikens Medel. Lund 1930. (此の入手し難き好著を一讀し得たのは、栗村雄吉教授の御好意による。) Lindahl: Studies in the Theory of Money and Capital. Part II. The Rate of Interest and the Price Level. はその部分的英譯である。

3) Medel, s. 31. Money and Capital, pp. 158-159.

しかしリンダールの構想は一層詳密である。経過を單に期間に分割するに止まらず、此等の期間は夫々謂はば均衡期間 (Gleichgewichtsperiode) として考へられる。即ち、諸個人が豫め價格に關して充分なる知識を有し、その價格に基いて態度を決定する以上、需要と供給とが一致し、その結果均衡が成立する、と假定され、更に此の均衡は、期間中條件が變動せずといふ前提によつて、その安定性を保證される。(勿論此の安定性は極めて短い期間中に於いてしか保證されない。) かくてリンダールが後に均衡的方法 (equilibrium method) と名付けた此の方法は、動學的経過の均衡期間への分割として特徴づけられ得るであらう。

一例としてロバートソンの所謂「不妊の資本形成」(Abarotive Lacking)⁴⁾ についてのリンダールの説明をとらう。今、貯蓄性向のみ増進し、然も此の増進は持續的と期待され、其他の事情は、出發點として擇られた靜態的狀態から少しも變らぬとする。従つて投資も亦不變である。此場合若し貸付利子歩合が従前の水準を維持してゐるとすれば、此の結果(消費數)價格水準は下落することにならう。何故かなれば、企業者の純益率計算を支配するものは貸付利子歩合の高さであるが、此の高さ不變なるが故に生産事情は毫も變らず、従つて消費財生産高は、貯蓄増加により消費支出減少するに拘らず、不變に止るからである。かくて消費財價格水準が下落するから、自然資本財價格水準も亦下落し、此結果意外の損失を生ずるから、結局純貯蓄は、貯蓄性向の増進に拘らず、従前と變らぬこととなる。新實物投資は起らず、貯蓄は實を結ばない。更にリンダールは次の如く絞べてゐる。「分析を容易ならしめる爲に、吾々は此の経過を二つの段階に區分した。一つは、或る期間より他の期間への推移時點に於いて起るところの、利潤及び損失を伴ふ價格下落であり、他は、需要と供給とが現行價格によつて定まると假定された場合、期間中執り行はれる取引であり、夫々の期間を通じて此等の價格は不變である。此の経過は、貯蓄の大きが變らず利子歩合が据置かれる限り、更に繰返される。」

リンダールの分析方法は略々上記の如くであるが、此の例解が適切に示す通り、その方法はロバートソンのそれと根本に於て類似し、ただその構造を假設によつて明かならしめたに過ぎない。⁵⁾ これについて吾々は論ずべき

4) 尙此點については、Lindahl: Prisbildningsproblemets uppläggnig från kapitalteoretisk synpunkt, Ekonomisk Tidskrift (1929, II.), s. 61. 及び、Money and Capital, p. 318. 參照。(後者の Part III. The Place of Capital in the Theory of Price. は前者の英譯である。)

5) Robertson: Banking Policy and the Price Level, 1926, pp. 45-47, p. 64. 尙

言葉を持たぬわけではないが、然し順序として暫くミユルダアルの此點についてのリンドアル批判に耳を傾けることが必要であらう。蓋し、問題が今日見る形にまで掘下げられるに到つた功績は、たしかにミユルダアルの擔ふところであるからである。さて彼の批判は次の通りである。^(註二)

「リンドアルは動學的經過を二つの、互に絶えず交替し合ふモメントに分つ。便宜上ここではこれをモメントA及びモメントBと呼ぶこととしよう。モメントAは無時間的 (atids, zeitlos) であり、モメントBの間の移り行きを表すに過ぎぬ。これに反してモメントBは無時間的でなく、ただ『短い』といふだけである。然しモメントAの中には、個々の企業者の豫想しなかつた變動が一切含まれてゐる。換言すれば全經過がそこに含まれる。蓋しモメントBの下では假定によつて價格・供給・需要の間の均衡が完全に支配する——特に資本市場に於て然り——からである。

さて今問題としつつある如き場合に於ては貯蓄變動より生ずる一切の價格變動があまらずとこなく現れつくすところの、無時間的Aモメントが出發點狀況自體の中に於て (i själva utgångsläget, in der Ausgangslage selbst) 起る。ところで此の無時間的經過は此の場合、分析されざるままに放置される。ここでは均衡状態が支配し豫見されざる變動は生ぜぬと前提されるところのBモメントは、其後に生ずると假定される。此のBモメントに於てリンドアルは資本市場の均衡を考へようとするが、此の均衡は前提自體に既に含まれてゐるのである。然乍ら最初のAモメントが含む變動の動因は引續き存在するのであるから、Bモメントに次いで突如 (plötzlich, plötzlich) 新しいAモメントが起り、そこで再び一切の變動が無時間的に且剩すところなく起り、更に亦Bモメントがそれに續き、以下同様にして無限に繰返される。

此の方法は誤謬であり、常に如何なる場合にあつても效果的ではない。何よりも先づ、既述の通り、説明さるべきものが説明されずに残される。然し更に問題が存する、何故にBモメントは新しいAモメントに移行するか、また何故にそれは最初から生じないのであるか？抑々如にしてBモメントはAモメントから成立し得るのであるか？何故に均衡の擾亂は連續的でないのか？原則的に個々の收入乃至支出の出來事は夫々豫見されざる變動でないのか？」

「ここで問題となつてゐる如き性質の經過を研究する唯一の可能性は明かに或る状態に於ける傾向乃至は或る状態から他の状態へ (即ち或る期間中の) 運動 (tendensen i ett läge, resp. själva rörelsen från ett läge till ett annat, d. v. s. under en period — die Tendenzen in einen Lage, bzw. die Bewegung von einem Lage zu einem anderen, d. h. während einer Periode) を持

Lindahl も此箇所を引用してゐる。

6) Medel, s. 75. Money and Capital, p. 295.
 7) 尤も内容的には、貨幣數量説を採るか否かについて大なる相違がある。(Medel, s. 106 ff. Money and Capital, p. 235. 参照)。實際 Robertson の期間分析と瑞典學派のそれとは此の點で大きな相違を有するが、それはここで

究することだけである。」

ミュルダアルのリンダアル批評は以上の如くである。いふまでもなく、市場現象としての價格形式過程と諸個人の經濟的考量及びそれに基づく經濟活動(需要供給についての態度の決定)の過程とは概念上區別さるべきものであるし、またかかる區別が認められればこそ、リンダアルは價格變動過程と經濟取引が行はれる過程とを時間的に區別し、兩者を夫々孤立的に取扱はうとしたのであらう。然し乍ら此の二つが現實に於て複雑なる相互作用關係に立つことは直ちに明かな事實であるし、然も價格變動は恰も價格の決定と需給の態度の決定との二つの過程の相互作用に於て成立するのであるから、此の相互作用關係を明かにすることは經濟變動理論の基本的課題の一つでなければならぬ。リンダアルの分析に於て此の相互作用關係は問題の範圍から取去られ、寧ろ回避されてゐるのであるから、ミュルダアルの此の點についての批評は當つてゐるとせねばならぬ。更に亦此の問題にして答へられぬ限り、AモメントとBモメントとの間の關係も謂はば木に竹を繼いだ如き關係を脱し得ぬのであるから、ミュルダアルの批判の重點はここに存したと見らるべきであり、而して亦それは正しい批判と認められよう。要するにミュルダアルの説く如く、リンダアルの圖式は、「貨幣理論的に重要なものは變動の生起(前になされた豫想の齟齬)であるに拘はらず、此の方法を以ては此の變動を把握し得ぬ點に於て」、效果的でないのである。

(註一) この場合ツガン・バラノオスキイが不比例説(消費過少説批判)論證に、マルクスの再生産表式の構想を利用した事實が想起されるかも知れない。(參照、鎌本博譯、英國恐慌史論、第二編、第一章)。又同様に、シュビイトホフも亦その投資過剩説の説明に當つて類似の表式を利用してゐる。Spiethoff: Der Kapitalmangel in seinem Verhältnisse zur Güterwelt, Schmollers Jahrbuch, Jfr. 35, Hft. 4, 1909, S. 56 ff. 然し此の事實は差當り吾々の當面の問題とは無關係である。

の問題ではない。尙 Lindahl と Robertson の間の連絡は明かにし難い。
8) ここで Myrdal は上記の貯蓄増加の場合の例について批判を進めてゐる。
9) G. Myrdal: Der Gleichgewichtsbegriff als Instrument der geldtheoretischen Analyse, Beiträge zur Geldtheorie, hrg. von F. A. Hayek, 1933, SS. 430-431. 尙 Lindahl は事實に於て此の Myrdal の批判を承認してゐる。 Cf.

(註11) A. J. Lindahl, Gunnar Myrdal: Om penningteoretisk jämvikt. En studie över den "normala rätlan" i Wisshells penningteoretiska Ekonomisk Tidskrift, (1931, V-VI), s. 228-229. の敘述をそのまま引用する。彼の論文 Der Gleichgewichtsbegriff als Instrument der geistheoretischen Analyse, Beiträge zur Geldtheorie, hrsg. von F. A. Hayek, 1933, SS. 430-431. の敘述はこれに對應してゐる。参照された。

二

リンダアルの方法が上記の如き缺陷を有するとすれば、それは如何に修正さるべきであらうか。現實化の爲にはリンダアルの構想の一切の放棄さるべきであらうか。それともそれは何らかの修正によつて救はれ得るであらうか。リンダアル自身其後論じてゐる様に、¹⁾此の方法が靜學的理論を直接に動學化しようとするに有効であり、然も「厄介なエクス・アンテ及びエクス・ポストの用語法」が此際回避される(此の二種の範疇は完全な知識が豫想されてゐるから絶えず一致する)點に於て長所を有することは争ひ難く、更に亦、「動學的發展の荒筋だけ敘述しようとする場合」(when we aim at a description only of the main lines of a dynamic development)にあつては、その結果は大なる誤差を生ぜぬかも知れない。然しそれが近似的結果を與へるに止まることは明かであり、その誤差も無視し得るとは豫め斷言し難い。ここに於て形式的であるにせよ、無難にして且一般的な方法を形成し、それに基づいて此の方法のもつ弱點の大きさを自覺する必要が生ずる。然らば此の意味に於ける修正は如何なる方針に従つて爲さるべきであらうか。

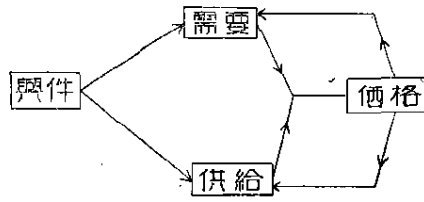
先づ明かなのは、「期間」概念の取扱ひである。いふまでも無く、期間がそれ自體何らの經濟的意味を有せず、動學的經過の期間への分割が形式的に止る限りに於ては、期間概念を導入することに問題はない。ただそれが例

Lindahl: Money and Capital, p. 69.

1) Lindahl: Money and Capital, pp. 68-69. 尙ここで上記の方法は「均衡的方法」(equilibrium method)、より精確には第二の均衡的方法と呼ばれてゐる。

へば上記の「均衡期間」といふが如き、何らかの内容的意味を含むに到つたとき始めて、問題が起るが、此の場合先づ、凡て變動は期間の切目に於てのみ起るとするリンダルの假定は明かに不合理である。期間の長短如何に拘らず、此の假定は斥けらるべきものと思はれる。

然し、今の場合此の點に比して遙かに重要なのは、諸個人が價格について完全なる知識を有し、その結果、期間中安定せる均衡が支配するといふ假定である。先づこれについて原則的な批評を致すべし。——既に觸れた



やうに、價格形成と需要供給についての諸個人の態度決定との間には、假に上圖を以て表はし得る如き、相互作用關係が存し、此の螺旋的相互作用關係は如何に短い期間をとつても、無限に反覆され得る如き性質のものであるが、リンダルの假定は、此の相互作用が一度しか行はれぬことを意味するものである。更に此の循環は一應自己完了的であると解されてゐる。然し乍らかかる前提の下では解決さるべき問題が解決されずに残ること、既述の通りである。かくて、かかる無限に反覆される此の螺旋的相互作用關係を是認することから、經濟變動理論は出發しなければならぬ。言葉を換えて云へば斯うである。所謂「合理的錯誤」が經濟變動理論に於て中心的位置を占める事實は改めて論ずるまでもないが今問題とするリンダルの假定は此の合理的錯誤の缺如を意味するものとも云へよう。合理的錯誤に正しい位置を認めることを困難ならしめる如き此の假定は最早支持し難い。

然し問題はこれだけに止まらない。上記の如くリンダルの假定は、夫々の期間中を通して、需要と供給との一致が

保たれるといふ意味に於て、均衡が成立することを假定してゐる。然し乍ら、ここに云ふ需要供給とは何であるか。所謂此の「均衡的方法」の意圖するところが本来靜學的用具の變動理論への適用であることからすれば、ここに需要乃至供給とは、靜學的理論が取扱ふものでなければならぬ。然し變動過程が問題である限り、かかる概念のみで事態を處理し得ぬことは明かである。即ち、動學的需要函數及び動學的需要函數を概念せざるを得ぬ筈である。²⁾然しリンダアルは一方に於てはかかる概念規定を拒否しつつ、然も他方に於て、例へば消費財供給量(有名な方程式 $Y = C + I$)³⁾に於ける C の取扱ひに於てストックを差引いてゐることが示す様に、需要及び供給の概念を純粹に靜態理論の意味に於ては使用してゐない。此の結果は、上記の假定が内容的に一義的たり得ず、需要及び供給として何を概念するかによつて種々様々の意味を持ち得るといふことである。此の點についてリンダアルの此の假定は曖昧を含み、形式的にこれを解すればその理論内容と矛盾する。^(註)然し若し一步を進めて需要供給の觀念を現實に即して規定しようとするれば、現實に於ては賣られただけの數量しか買はれず、買はれた數量だけしか賣られないのであるから、此の假定は假定として全く無意味に歸するであらう。かくて此の假定は放棄されねばならぬが、然し此の動學の意味に於ける需要及び供給は如何にして決定されたか、その技術的理由は如何なるものであるか、その心理的動機は如何なるものであるか、について問題は残る。經濟變動理論は、常に需給の一致するところに價格が定まるといふ自明の事實を出發點とし、此の需要及び供給が如何にして夫々一定の大きさにまつたかを明かにすることから分析を始めねばならぬ。³⁾

しかし今若し以上の主張にして是認められるとすれば、逆に亦、リンダアルの批判者として現れたミュルダ

2) 此等の概念については、拙稿「靜學的均衡理論と動學化の問題」(經濟論叢四七ノ三)に紹介したる R. Frisch の説明を参照されたい。

3) 最近 Hicks が探らんとしつつある立場はこれである。Hicks: Value and Capital, p. 131. を見よ。私は嘗て此の立場の最もすぐれた代表者を R. Frisch に見出し、これを「瞬間均衡的分析」(momentary equilibrium analysis)と呼

ルの積極的主張自體も亦批判されねばならぬことにならう。問題とさるべき論點は、彼の展開のうち最も著聞に屬するところの、かのエクス・アンテとエクス・ポストとの計算の區別に關する。此の區別については詳論を避けるが、此の區別の意義は、一度樹立された計畫は當該期間中は變更されることなく實施される、といふ點に存すると解せられる。従つて錯誤に對する修正が不斷に行はれ、かくて當該期間中にあつてすらも計畫が絶えず變更される場合には、此の區別は最早本來の意義を失ふと云はねばならぬ。(勿論この爲に豫想要素の導入が不可能となる譯ではない。)然るに若しミュルダアルがリングダアル批判の立場を貫徹しようとするれば、錯誤に對する不斷の修正を認めねばならなくなるが、此のことは上記の範疇區別の方法的意義の否定に導く他ないであらう。⁴⁾なほこのことがミュルダアルの貨幣的均衡の理論の内容自體とどう關係するかについては別に論ずる機會を待つ。兎に角ミュルダアルの如く期間分析を方法的に否定する限り、エクス・アンテとエクス・ポストとの計算の區別はその基礎を失ふのであつて、ここにリングダアルの「不均衡的方法」の構想を必要とする理由が存するのである。

(註)「リングダアルの圖式に失業をとり入れることは不可能であらう。失業は常に明かに、その時々の價格に於ては完全に需要されざる供給であるからである。當然同様のことは其他の取引の對策にも妥當する。此の失業が變動過程に於て演ずる役割についてのリングダアルの極めて興味ある説明は、その積極的内容の部分に於ては彼が幸にもその謬れる理論的要素を忘れてゐることを示してゐる。」(Myrdal: Om penningteoretisk jämvikt. s. 230)

三

リングダアルの新著「貨幣及び資本の理論の研究」第一部 (The Dynamic Approach to Economic Theory) は最近の彼の方法的立場を明かにしたものであるが、これに於て彼は以上で問題とした彼の所謂「均衡的方法」にまさるものと

んで、期間分析に對立せしめた。(拙稿、ロバートソンの物價變動理論、經濟論叢、四九ノ一) Hicksの方法、temporary equilibrium analysisの前者への距離は後者への距離よりはるかに小さい。此の意味に於て、Lindahlの如く、Hicksの方法をLindahlの意味に於ける「均衡的方法」と同一視するのは正しくない。

して新しく「不均衡的方法」(disequilibrium method)を提唱してゐる。³⁾ 前節で豫め論じた通り、「均衡的方法」の吟味に當つてはミユルダールの批判を考慮して、その指摘した缺點を承認してゐるが、然し此のことは決して期間分析の方法の放棄を意味するものではなく、單に動學的經過の均衡期間への分割の放棄を意味するに過ぎず、新しく提唱する「不均衡的方法」は、その本質に於て、これに代ふるに動學的經過の不均衡期間への分割を以てせんとするものに他ならないのであつて、然もこれによつて、かのエクス・アンテとエクス・ポストとの計算の區別はその創始者たるミユルダールの理論に於けるよりも、遙かに適當な方法的基礎を得ることになるのである。ここに於ては、期間概念は均衡期間としての意味を失ふけれども、然しその間諸個人の經濟計畫が不變に保たれ且價格も亦固定される期間として尙重要な經濟的意味を保有してゐるのである。換言すれば、變動過程は、從前通り、短い期間に分割され、計畫の修正及び價格の變動はただ期間の切目に於てのみ起る、とされるのである。此の場合注目すべきは、かかる方法の現實的基礎が一層深刻且詳細に反省されてゐることである。以下此の點について彼の展開を紹介批判しよう。

リンドアルは、上記の如き經濟的意味を有する「期間」概念を動學的分析の基礎たらしめんとするのであるが、その理由は、一言にして云へば、現實的なるが故に他ならぬ。即ち現實に於て、一旦樹立された經濟計畫は一定の期間の間無修正に止められ、計畫の修正は非連續的にしか行はれない。同様にして價格變動も亦非連續的にしか行はれぬ。此等の事情がかかる期間概念の導入を根據づけるのであるが、然し此の期間中に於て需要と供給との一致が保證される必然性は何處にもなく、従つて此の期間は不均衡期間である。然らばリンドアルは、如何な

4) Hicksによれば、貯蓄と投資との均等は、單に ex post の計算についてのみでなく、ex ante の計算についても成立つといふ。(Value and Capital, p. 183.) Myrdal も亦 Lindahl と對蹠的なる立場を貫かんとすれば、かかる結論に到達せざるを得ないであらう。然し乍ら Hicks の如く云ふ場合に於ては、ex ante と ex post との計算の區別は、假定が取換へられたため、その本來の意

の意味に於て計畫修正が非連続的であるといふのか、また價格形成が非連続的であるといふのか、而してまたそのことは如何にして上記の期間概念の導入を根據付けるか、此の點の詳細な展開は確かにリンダールの新しい寄與の一つに數へられるから、詳細に彼の主張を聞くことにしよう。

先づ第一の點について。³⁾——人間は自己の周圍に起る一切の出來事を連続的に記録するレテスタテことは出來ぬといふ、人間の知識の不完全 (the imperfection of human knowledge) の事實から彼は出發する。人間は、或る一定期間中得られた結果全體を觀察し或は一定時點に關する重要出來事だけを記録して、周圍の出來事を非連續的・間歇的に (intermittently) 考慮し得るに過ぎない。經濟主體の豫想及び計畫が非連続的にしか變らぬといふことは、此の事實の結果として理解される。此の意味に於て計畫は少くとも、事情の變動が意識されて次に再び意識されるまでに經過するところの「記帳の期間」(Period of registration) の間は固定されてゐるが、然し亦變動が意識されて計畫修正が決意されるまでも多かれ少かれ若干の時間が經過するから、「計畫が固定されてゐる期間」(periods with fixed relevant plans) は此の「記帳の期間」よりも長いと考へられねばならぬ。

以上は個人についてのマイクロ・エコノミックな考察にすぎない。當面の問題となつてゐる社會經濟全體に關するマイクロ・エコノミックな考察に關してはどうであらうか。これについて先づ彼は次の如く注意する。

「マクロ・エコノミックな變數は凡て時の函數と看做すことが出来る。然し注意を要するのは、夫等を便宜的に時の連續函數として定義し得ぬといふこと、これである。問題とされる行動の或るもの、例へば價格の中出・販賣・其他の取引の如きは、嚴密に云ふとき、タイム・デイメンションを持たぬ。従つて夫等は特定時點に對應せしめられねばならぬ。さもなくば結果全體が計算されるやうな或る一定の期間に對應せしめられねばならぬ。例へば生産に投下される用設の量の如く、タイム・デイメンションを有する變數が此の他にあることはある。然し此の場合にあつてすらも通常問題なのは或る一定の期間に對する結果全體であつて、次に起る連續的變動ではない。かくてマクロ・エコノミックな現象の場合にあつてもまた、經濟發展は、得られた結果全體が計算される如き期間に分割するべきである。若し若干の場合變數の數値が或る一定時點に關して確定するべきであるならば、此の點をかかる期間の切目たらしめるのが最も便宜であると思はれる。」

ところで然し、ここに考ふべき事情が存する。かかるマクロ・エコノミックな現象は諸個人の相互獨立的な經濟活動の合成的な結果であるが、此等諸個人の經濟計畫は決して互に compatible, consistent であるとは限らぬ。綿花商人は綿花百斤七十圓で

を失つてゐることを注意すべきである。

- 1) 此の著書のうち第一部のみが初めての發表に關し、他の部分は既に瑞典語で發表されたものの英譯である。
- 2) Money and Capital, p. 60.
- 3) Money and Capital, pp. 40-60.

賣る豫想の下に計算を樹て、紡績業者は綿花百斤六五圓で買ふ豫想の下に計畫を進めてゐるとすれば、少くとも兩者のうち何れかは早晚豫想と計畫とを修正せざるを得ぬであらう。かくの如く豫想の不一致は計畫の修正を必然ならしめるが、社會經濟全體を通じて見れば、諸個人が夫々獨立に行動し夫々相手の行動について完全なる知識を缺如する以上は、絶えず隨處に於てかかる豫想の不一致が曝露し、計畫の變更が繰返される。此の事情は上記の如く経過を期間に分割することを不可能ならしめるものではないであらうか。かかる事情についてリンドアルはかう考へる。此の事情あるが故に期間は能ふ限り短く取られねばならぬが然し乍らそれで充分である。「計畫の修正を連續的と考ふる必要はない。既述の如く新しい計畫を實施すべき決意は若干の特定時點に配置され得るから、所與の場合に於ては此等の時點の間には、その間一切の計畫が不變に保たれるが如き或る時間が常に経過せねばならぬ。従つて吾々の圖式は、使用され得る時間が充分短期であるならば、嚴密に論理的な觀點からしても、直接に適用して差支へない。更に亦吾々の圖式を實際の問題に適用するに當つては、計畫變動の間に経過する期間は甚だ短いものでなく、實際的意義あるだけの長さを持つと假定することは、極めて正當な假定である點が注意されねばならぬ。」

次に第二の點に移る。⁶⁾價格形成が非連續的にしか行はれぬといふ主張を説明する爲に、彼は、一團の人人(賣手であることもあるし、買手であることもあるが、以下簡單の爲賣手として置く)が價格を申出で、(offer)、他の人々がこれを受容する (accept)關係に於て價格が形成されて行くことに注目する。更に彼は此の上に、かくの如く申出られた價格は残りの賣手達——吾々は賣手の一部が價格を申出ると假定した——も、亦全部の買手達も凡て直ちに此の價格を受容する、といふ假定を設ける。「かくて價格形成過程は連續的なものではない。グラフで表せば、供給價格及び需要價格は時間軸に平行であり、價格が變動する點に於て不連続である。此等の價格に於て行はれる取引は、此等の價格が取極められる時點に於て時間軸に垂直な直線として表はされる。」⁷⁾

以上の如くにして計畫の修正も價格形成も凡て非連續的にしか行はれぬとされるが、更に計畫修正時點と價格形成時點とは、前前節の場合と同様に、同一であると假定される。即ち、期間の切目に於て計畫の修正も價格形成も凡て一舉に行はれるのである。「中心的なる價格形成問題は……期間中何か起るかに直接關せずして、寧ろ期間の推移點に於て起るところの複雑なる出來事に關する」と云はれるのも此の意味に於てである。

リンドアルの所謂「不均衡的方法」の内容は略々以上の如くであるが、然らば此の方法は如何に見らるべきであ

4) Money and Capital, p. 53.
 5) Money and Capital, p. 55.
 6) Money and Capital, pp. 60-64.

らうか。此の方法は嘗て彼が採用したところの均衡的方法を補正して剩すところなきものと看做され得るであらうか。豫め注意すべきは、市場構造についての彼の説明である。市場参加者を價格を申出る人々とこれを受容する人々とに區分する構想は獨占的市場形態を前提するかに見える。然し、問題が變動過程に關する今の場合にあっては、獨占的要素が存しない場合にも此の構想は適用出来る。従つて此の點に問題は存しないと見得るが、然し競争者が多くなるに従つて、これに附隨する假定、即ち或る人々の價格の申出に對して他の人々が直ちにこれを受容し、申出られた價格は或る一定期間の間は市場を支配するといふ假定の妥當性は逐次減少するであらう。

次に注意を要するのは、此のリングダルの構想が期間分析にとつて極はめて好都合な點である。即ち、エクスマンテの計算とエクス・ポストとの計算を一應區別しつつ、然も兩者を適當に結合することによつて、經濟變動過程を理論的に再構成せんとする期間分析に對して、此の「不均衡的方法」は實に恰好的方法的基礎を形成する。寧ろ彼の研究は此の意味での期間分析が如何なる方法的前提に立脚するかを明かにせんとするものに他ならず、従つてロバートソンの方法的精密化乃至基礎付けとして學說史的に特徴づけ得る、と云つても決して過言ではない。¹⁾例へばリングダアルは展望的範疇と回顧的範疇との關係を論ずるに當つて、貨幣支出（生産的目的及び消費目的のため）のそれが、價格の如何に拘らず、豫定通りなされるといふ假定の意義を力説してゐるが、此假定は、ロバートソンが暗黙の、然し決定的重要性を有するものとして背後に潜めてゐたところのものであつた。勿論、既に論じた通り、貨幣數量説について兩者の見解は極端に對蹠的であり、此の結果の故でもあらうが、ロバートソンは取引數量所與にしてこれと貨幣の流れとの關係より價格が定まると見るのに對して、リングダアルは價格が豫め指

1) 此の點及び以下については、拙稿「ロバートソンの物價變動理論」(經濟論叢、四九ノ一)を参照されたい。

令され數量がこれに應ずると見るのであるが、今此の點は吾々にとつて重要ではない。かくて別の機會に詳論せる如き期間分析の長所は直ちにとつて此の「不均衡的方法」の長所とすることが出来る。即ち、此の方法によれば一定のイニシアル・ポジションと次々に變動し行く與件とが與へられた場合、如何にして價格の變動が生ずるかを、豫想要素を顧慮しつつ、従つて動機にまで溯りつつ、因果的に跡づけ得るのである。然も此の場合期間中支配する状態を豫め均衡と假定せぬことによつて、「均衡的方法」の既述の難點を免れ得てゐるが、更に亦此によつて價格變動の因果的説明も可能となつてゐる。即ち、此場合價格は、成程直接的にはただ價格を申出る人々の恣意によつて指令されることになつてゐるけれども、然し間接には、此等の人々の態度を定めるのは過去の市場の狀況に他ならぬのであるから、結局價格は市場の狀況に基づいて決定せられることになるのである。此の意味に於てリンダアルの此の構想は、一方に於てロバートソンのそれよりも稍平明を缺ぐにしても、然しそれによつて致命的缺點を受くるに到らず、よく期間分析的方法的長所を發揮せるものと云ふべきであらう。

かくの如くして不均衡的方法是、より精密なる方法的基礎に於て、期間分析の特徴を發揮せんとするものであるが、然しそれは同時にその根本的缺陷をそのまま保有してゐるのである。此の點について問題となるのは、計畫の修正並びに價格形成が常に期間の切目に於てのみなされるといふ假定である。此の假定の非現實性の意味は、その内容に立入つて觀察するとき、明瞭となる。今便宜上特定商品の市場を考へ、これに於て價格を申出るものは賣手側に存するとする。先づ此の假定は、價格を申出なかつた賣手は直ちにその價格を受容し、自らの供給曲線の命するところに従つて一定數量だけ供給することを意味する。此の賣手は、假により安い價格を申出る

2) 此の意味に於て Money and Capital, pp. 74-136. Algebraic Discussion on the Relations between some Fundamental Concepts. は投資及び貯蓄の概念規定を明かにせるものとして教ふところ多い。

ことが可能にして然も有利であるとしても、一定の期間の終るまでは、價格受容の不利に甘んずる。これが此の假定の命ずるところである。³⁾更に亦、買手側について云へば、彼等も亦此の申出價格を需要するが、買手は該商品に對する需要曲線との關係に於てその需要量を決定するのではなく、此の受容價格と貨幣支出豫定額との關係に於て需要量を決定するのである。此のリングダルの構想に於ては經濟理論の傳統的要素としての需要曲線は不要である。^註

假定の意味するところは、かくの如く非現實的であるが、その結果生ずる不均衡に於ては一層の困難が示される。上記の如き場合、賣手がその豫想需要量に應ずるだけの供給をなし、買手側の需要量がこれに達せぬときは市場は明かに不均衡に陥るが、吾々は此の場合についてリングダルの、此の供給に不足せる需要量の夫々の賣手への振分けは如何にして行はるるか、を問ひ度いと思ふ。リングダルの立場からは此の問題は、現實に於ては自然の解決が與へられてゐるに拘はらず、結局答へ得ないであらう。

(註) 例へば生活必需品價格が騰貴した場合を考へよ。即ち、買手に對して豫想以上に遙かに高い價格が此等の商品について申出でられたとせよ。此の場合需要數量は恐らく不變に止められ需要の非弾力性、貨幣支出が増加せしめられるであらう。即ち、需要數量は固定した貨幣支出との關係で定められるのではなく、需要曲線に従つて定められるのである。尙 *Pro-pensity to hoard* 乃至 *Liquidity preference* との關係については既に「貨幣數量説の動學化としての期間分析」にて於て詳論した。

3) 此の點は恐らく産業の構造と關聯するところ多い。競争的要素かが強ければ強い程此假定は非現實的である。